

## 新島襄のチャレンジ精神

井上 勝也 [いのうえ・かつや]	同志社大学名誉教授
---------------------	-----------

## 私の受けた教育・私の学び

私は一九三六年生まれで、現在七十二歳です。半世紀前は皆さんと同じ同志社大学の学生でした。文学部に入学したのは一九五四（昭和二十九）年、十八歳のときでした。敗戦時の一九四五年は満十歳で、当時国民学校といいましたが、四年生でした。それまでに受けた三年半の教育は典型的な国家主義・軍国主義教育で、国家のいうこと、教師のいうことは絶対に正しいと信じ込まれていました。八月十五日を境にして二期以降に受けた教育は手探りの民主主義教育でした。

皆さんに国家主義教育と民主主義教育の違いを「人間の命は羽毛のように軽い」という表現と、「人間の命は地球より重い」という表現で説明するのが一番わかり易いと思います。我々小学生には日本が戦争に負けたのだということは、感覚的に理解できましたが、なぜ羽毛のように軽い命が地球より重くなるのかがわかりませんでした。私はこの素朴ではありますが、根源的な問いを抱きながら、中学校、高校に進むにつれて、結局国家のいうことも教師のいうことも鵜呑みしてはいけない、自分で一生懸命考えて、自分で正解を見出すしかないのだと考えるにいたりしました。

私は同志社大学では文化史学専攻に入学し、三年次に教育学専攻に転専攻しました。私の大学時代には、戦争中に国家主義教育のお先棒を担ぎ、戦後は何の自己批判もしないで平和主義者のような顔をして教壇に立っている教師が沢山いました。そのような姿勢を批判されると、「あの時はやむをえなかった」と開き直るのです。我々学生はそのような教師に再び騙（だま）されたくないという気持ち強く持っていました。

さて、私が大学時代に尊敬していた思想家の一人に河合栄治郎（一八九一—一九四四）がいます。私は古本屋で彼の編纂した「学生叢書」を片っぱしから買い集めて読みふけりました。なぜ河合栄治郎なのか。それは東大の教授であった河合が東大を追われ、右翼や軍部や文部省の圧迫に屈せず、国家権力を相手に堂々と戦いを挑んだこと、そして一九三九年出版法違反で起訴され、四年にわたって法廷闘争を展開し、彼の理想主義を主張しつづけた人物だったからです。私は彼の裁判記録を読んで、涙が出るほど嬉しく思いました。戦争中にこんな生き方をした人がいたのだ、自分の思想を身体で守ろうとした人がいたことを知ったからです。

私は同志社大学の教員時代の一九七〇年代、激しい大学紛争を体験しました。このことがきっかけになって自分が学び教えている大学の創立者新島襄（一八四三—一九〇）に本格的に接近するようになりました。私は新島の生き方や考え方を知るにつれ、大学時代河合栄治郎に出出したと同じ、あるいはそれ以上の魅力を新島に感じるようになったのです。それは新島の生き方の首尾一貫性と共に彼のパトス（情熱）と彼のチャレンジ精神です。彼は困難をもとめせず突き進みます。彼の慎重に準備し、大胆に行動する姿勢が私には大きな魅力でした。同志社大学に学び、自分探しの真っ最中の皆さんに、新島襄はこんな生き方をしたんだよ、彼の四十七年の生涯はチャレンジの連続だったよ、ということをお話したいのです。

## 新島襄の生い立ち

新島は一八四三（天保十四）年、安中藩の下級士族の長男として江戸で生まれ育っています。彼は江戸っ子です。彼の青少年期はいわゆる幕末で、内憂外患、大きく時代や社会が変化して、日本が西洋列強の餌食にされる危険性が迫っている時代でした。一八五三年と五年の二回にわたるペリーの艦隊の来航、とりわけ五年の軍艦を四隻から七隻に増やして江戸湾深く侵入してきた事件は、幕府はもとより江戸の住民一〇〇万人にとって大きな恐怖を与えました。艦砲射撃をされると江戸の街は火の海になり、江戸湾を封鎖されると一〇〇万人の食糧が搬入できなくなるからです。当時は食糧のほとんどを海路で運んでいましたから。新島はこのペリーの来航によって生まれて初めて日本が外国に侵略されるといった危機感を抱いた（Life and Letters, pp. 21-22）ようです。私は、彼の満十歳のこの原体験がその後の彼の生き方に影響を及ぼしていると思います。

一八六〇（万延元）年、十七歳の新島が江戸湾岸を歩いていたとき、沖合にオランダ軍艦が停泊しているのを目の当たりにしました。彼は帆船母との対比で日本と西洋の力の格差を強烈に印象づけられたと申しています。この出来事の直後から築地にありました軍艦教授所（後に軍艦操練所に名称変更）に入学し、彼は週三回航海に必要な高等数学、オランダ語のテキストで球面三角法を学び、天体観測をして緯度、経度の計算の仕方を学んでいます。当時アメリカ通の中浜万次郎が航海学を教えていました。彼がこの軍艦教授所に学んだのは一年十ヶ月で、未（いま）だ海外渡航が禁じられている時代に、すでに海外雄飛を考えていたのかもしれませんが。

一八六一（文久元）年ロシアの軍艦が対馬の一部を占拠する事件が起こりました。これはロシアの南下政策の一環で侵略の拠点づくりです。幕府は自前で退去させることができず、イギリスの軍艦に頼んで退去させました。この頃江戸にいる新島には全国の情報がどんどん入ってきます。各地で起こっている農民一揆や尊皇攘夷運動に伴う暗殺事件や西洋列強の日本侵略の可能性についての情報など。彼は我が国の現状と将来を真剣に考える青年に育っていきます。

十九歳の彼は一八六二（文久二）年の暮れから翌年にかけて約七十日間江戸と瀬戸内海の玉島を往復する航海実習を体験します。彼の乗った船の名前は快風丸で、一八〇トンのアメリカ製の洋式帆船です。洋式帆船と和船の違いは、洋式帆船の場合、風が逆風であっても、帆の張り方、角度を変えることによって前に進むことができる点です。和船が、逆風の場合は風待ちをし、経験と感で船を走らせるのに対して、快風丸は風に逆らって船を進め、球面三角法を使って船の位置を割り出すといったヨーロッパ人の合理性を新島はこの航海実習で体験するのです。彼は当時の尊皇とか攘夷とか公武合体といった政治運動に関心を示さず、むしろ日本の外に目を向けていたといえます。日本人の思考パターンは鎖国政策や海外渡航禁止の政策が長く続いたことや、日本が海に囲まれているという自然環境のために内向きであり、「井の中の蛙」のようにもって広い世界があることを知らない、いや知ろうとしない人間をつくってしまいました。

## 三冊の書物との出会い

新島は一八六三（文久三）年、二十歳のときですが、蘭学をやめて英学を学び始めています。英学への転換は当時としては遅い方です。この年彼は発想の転換を引き起こすような三冊の書物に出会いました。一冊目は中国語で書かれた『連邦志略』です。これはアメリカ合衆国の歴史・地理・文化についての情報を提供してくれる書で、彼はこの書を繰り返し読み「脳髓が頭からとろけ出る程驚いた」（Life and Letters, p. 4）と申しています。その理由はこの書に主権在民の民主主義が説かれ、独立宣言文の要約が載っており、大統領が国民によって選ばれることや、授業料タダの義務教育の学校が存在することなどを知ったためです。崩壊寸前の幕藩体制に押しつぶされそうになっていた新島は、日本と異なる民主主義体制の国があることを知ります。彼はなかでも国家は人民のために存在し、政府は人民を抑圧するような政治をおこなう場合、人民は政府を変更又は廃止（独立宣言文の原文を見ますと alter or abolish という単語が使われています）することを権利として与えられているという革命権を知ったことです。彼はアメリカに着いて三ヶ月後に英文の手記を書き、そのなかで「なぜ幕府は我々を自由にしないのか。なぜ我々を籠の鳥か袋のネズミにしておくのか。否！我々はそのような野蛮な幕府を倒して、アメリカのような大統領を選出しなければならぬ」（Life and Letters, p. 7）と書いています。この英文をご紹介しますと、“We must cast away such a savage government, and we must pick out a president as the United States of America.” となります。彼は幕府を「倒す」に該当する ‘overthrow’ という単語を思いつかず、‘cast away’ 「投げ捨てる」といっています。二十二歳の彼はラディカルなことを考えていた訳です。発想の転換を引き起こした二冊目の書物は『ロビンソン・クルーソー』です。組織に縛られていた彼には、二十八年間も絶海の孤島で孤独に耐えた主人公の独立自尊の生き方があることを知ります。三冊目はキリスト教関係の書物です。当時時蘇教は厳禁でしたが、中国から密輸入されるキリスト教の書物が広く読まれていました。彼はイエスが救い主で、人間の罪のために十字架にかけられたことを知っていました。（Life and Letters, p. 8）

新島は以上のような書物に触発されて、国禁を犯して密航を企てることを大胆にも考え始めました。当時密航を企てることは本人はもとより家族も厳しい処罰を覚悟しなくてはなりません。彼は二十一年間身につけていた忠義と孝行という倫理観のために密航を決断することを躊躇しましたが、祖国の現状を憂う彼は将来国家の改革者になり、祖国の近代化に貢献するのだという大義名分をもって密航を合理化しようとしています。しかし密航後も両親を悲しませたという自責の念に長い苦悶しています。

## 最初のチャレンジ—日本からの脱出

新島の四十七年の生涯で、この密航は最初の大膽なチャレンジです。ちょうど十年前の一八五四年に吉田松陰がペリーの軍艦に乗って密航を企てましたが断られ、最終的に彼が悲劇的な死を遂げたことを新島は知っていたはずですが。

チャレンジというのはいずれの時代でも危険を伴うもので、軽々に思いつきでできるものではありません。新島の密航は非常に慎重に準備され、しかし大胆に行動しています。長崎や神奈川の港ではなく、幕府の目の届きにくい箱館港を外国への突破口に選んだのは彼の緻密な計算が働いていたと考えられます。チャレンジを成功させるためには人の協力が欠かせませんが、新島のチャレンジにも彼を理解し、協力する多くの親友がいました。箱館で彼の密航を直接援助した福士卯之吉は新島とたった二週間付き合っただけで彼を信頼し、彼のために危険を承知で尽力してくれました。もし官憲に捕まれば福士もかなり重い罰を受けることになります。

新島を箱館から上海まで乗船させてくれたベルリン号のセイヴォーリー船長は、出航の二日前に初めて新島に会って彼の密航を援助しています。セイヴォーリーは密航者を乗船させてはならないという幕府の厳しい法律があることを知っていました。にもかかわらず新島を乗船させたために彼の所属会社にして、船長をクビになっています。

## 第二のチャレンジ—アメリカでの生活

新島の第二のチャレンジは、アメリカという江戸とは全く異なる文化や政治体制のもとで、彼の求めるキリスト教を自由に学び、日本の近代化に必要な近代科学（modern sciences）を学んで、将来日本の改革者になりたいという大きな願望を実現することでした。四年も続いた南北戦争が六二万人の戦死者を出して終了し、リンカーン大統領が暗殺されて三ヶ月目という社会的混乱の目立つ一八六五年七月に新島はボストンに着きました。誰も頼る人がいない彼は藁をもつかむ思いで、ロビンソン・クルーソーがやったように每晚神に祈っています。上海から乗船を許してくれたワイルド・ローヴァー号のテイラー船長は船主のA・ハーディーに新島のことを伝え、彼に会ってやってほしいといってくれました。テイラーと新島の間にはほぼ一年間の船上生活中に培われた太い信頼の絆がありましたので、新島をうまくハーディーに紹介してくれたのでしょう。そのためにハーディーも新島に関心があつたよ

うです。ハーディーは「なぜ極東から遥々アメリカへやって来たのか」と新島に尋ねましたが、彼の英会話能力では十分に説明することができませんでした。そこでハーディーは新島を海員ホームに三日間泊めて、手記を書くように申しました。彼は密航の一年前から英語を学び始めた割には現在の高校二年生ぐらいの英文文能力があったといえます。彼は生い立ちから書き始め、江戸幕府の圧政や彼のキリスト教理解を一生懸命書いています。このかなり長い手記は素材ではありませんが、ハーディーの琴(きん)線に触れ、新島襄という青年の有りのままを読み手に伝える内容でありました。ハーディーは南北戦争中貿易船を世界の海に十七隻も周航させる貿易会社の社長であり、一八六一年に共和党からマサチューセッツ州上院議員に選出され、ボストン市長にも指名されるほどの人望と手腕をもった人物でした。彼はアメリカン・ボード(キリスト教が未だ宣教されていない国に宣教師を派遣する団体)の役員であり、各種の社会奉仕活動に熱心な人物です。裸一貫のし上がったきた、立身出世型のハーディーは東洋人である新島の人物を見抜く鋭い目と鋭い感覚を持っていました。一八六五年十月三十日、ハーディーは自分が理事を勤めるアンドーヴァーのフィリップス・アカデミー(Phillips Academy)に新島を連れて行き、親しいテイラー校長に彼の指導を委ねました。二十二歳の新島は寮に入らずホームステイすることになりました。ホスト・ファミリーのミス・ヒドゥンは、最初東洋人で英語の話せない新島をホームステイさせることに躊躇しましたが、先ほどの手記を読んで彼を引き受けることになりました。二ヵ月たって一八六六年一月、彼女はハーディーに新島の近況報告をしています、その手紙の中に「We find Joseph a gentleman.」と書いています。ジョセフは新島襄のことです。また「We have made him a regular member of the family.」(Life and Letters, p.51)とも書いています。当時四十七歳のヒドゥンは、現地の新聞に載った彼女の死亡記事により、女子の中等教育機関であるアボット・アカデミー(Abbot Academy)の卒業生で、教会活動に熱心であり、彼女の世代では並はずれた知性と幅広い教養の持主であった(The Andover Town' sman, March 3, 1893)と書かれています。「私共はジョセフが紳士であることがわかりました。私共は彼を家族の正規のメンバーとして遇しています」という彼女の新聞評に私は注目したいと思います。gentlemanというのは欧米では最高の理想的人間像を意味します。ジェントルマン教育という表現があるのです。gentleman というのは信仰心が篤く、誠実で、礼儀正しく、教養があって、スポーツもでき、バランス感覚(sense of proportion)があり、向上心が旺盛で、人を思いやる気持ちがあり、共同体のことに真剣に、時には自己犠牲をもちとわれない人間のことで、ヒドゥンが二月にして新島をgentleman として見ていることに私は興味があるのです。ヒドゥンの手紙はハーディーから新島の近況についての問い合わせを受けて回答したもので、率直な新島評だと考えられます。日本人のお世辞ではありません。この手紙から新島がニューイングランドというピューリタンの社会にうまく適応していることがわかります。この手紙の別の個所に「ジョセフは感謝の気持ちが旺盛です」(Life and Letters, p.51)という表現もあります。彼がニューイングランドで異文化摩擦を起こさずに生活し、人びとの中にとけ込み、その中で彼が民族を越えて人間としての美点を周囲の人びとに示していたということです。

新島はニューイングランドの人びとから、まるで砂漠に水が染み込むようにあらゆることを積極的に学びとろうとしています。とりわけヒドゥン家に下宿しているフリント夫妻は新島の家庭教師を引き受け、フリントは彼にあらゆる教科を教え、妻は聖書のよき解説者になりました。三十七歳のフリントは長年アカデミーの校長を勤めた人ですが、当時アンドーヴァー神学校で神学を学び、牧師を目指していました。彼は、新島の神の摂理をひたすら学ぶとする真摯な姿勢に深く感動し、新島の成長を温かく見守っています。

新島がアーモスト・カレッジ(Amherst College)に入学するにあたってシーリー教授に宛てたフリントの推薦状に、次のような表現があります。「新島は秘かに祈ることを最も忠実に守っています。彼は最も献身的なキリスト者と交わることを好みます。彼は控え目で遠慮勝手で、彼の本当の価値はすぐには現れませんが、しかし彼は最も優れた人の一人であり、最も信頼に値する人です。彼の言葉は真実です」(Life and Letters, p.69)。同じ屋根の下に一年八ヵ月間共に生活し、教師の目線で新島の人的、学問的成長を見守ってきたフリントの新島評です。

新島は幕府や藩によって派遣された官費留学生ではなく、自力で裸一貫ニューイングランド社会に飛び込んできた留学生でした。したがって官費留学生が近代国家の文明の部分に目を向け、それを日本の近代化に役立てようとするのに対して、幕府や藩に縛られない新島は、文化にそして人間の生き方や教育や宗教に目を向ける自由がありました。彼は一八六六年十二月に洗礼を受けて、クリスチャンとしてニューイングランドの人びとの生き方に注目しています。彼は「全く国家の為に寸力を竭(つく)さんと」(全集三、二七頁)と燃えるような思いをもって近代国家アメリカの建設の秘密を探ろうとしているのです。

## アーモスト・カレッジでの学び

新島は一八六七年九月から三年間アーモスト・カレッジで学びます。このカレッジはピューリタンの子弟の高等教育機関で、典型的なリベラル・アーツ・カレッジ(liberal arts college)です。一八六二年のモリル法によって、農業や工業の専門家を育成する州立大学が各地に創設される中で、頑固にトータルな人間の育成-全人教育を目指す大学です。リベラル・アーツ・カレッジとか全人教育とはどういうことかといいますが、アーモスト・カレッジの教育は森を構成する木々に目を向けながら、合わせて森全体も見る、そして物事の表面だけを見て判断するのではなく、裏面も見、立体的・総合的にものを見る大切さを学生に悟らせようとしています。将来理科系のプロフェッショナルを志望する学生には、今のうちに文化系の科目も汎山履習するように指導します。造化(ぞうか)の妙(みょう)、すなわち造物主の存在を知り、主が造りたもうたものに畏敬の念を抱かせるために、地質学(geology)さえも学生に造化の妙を認識させるために使われます。「Noblesse oblige.」学生は恵まれているのだから、貧しい人、困っている人に手を差し伸べることを求めます。「A sound mind in a sound body.」知性が暴走しないように、しっかりした道徳性をもち、知性・道徳性が宿る器としての肉体を強固にするためにアーモスト・カレッジは全国の大学に先駆けて体育館をつくり、体育の授業を週に四回必修にしました。ほとんどの教師が大学のキャンパスに住み、学生との共同生活を通して、人間が共同体内存在であることを学生に認識させ、権利・義務・責任・協力・犠牲・調和といった社会性を身につけて、考えや立場を異にする人びとの意見にも真摯に耳を傾ける度量を培うことを求めます。学生たちは良識と鋭い判断力及び行動力をもち、自らも重荷を負って率先して山道を登るようなリーダーになることを理想視しました。要するにアーモスト・カレッジの教育目的は、一人ひとりの学生が知・徳・体の調和がとれ、独立自尊で、将来地方や国家の司令塔になるような人物の育成を目指している大学だということです。先ほど私は、新島の関心は軍艦や大砲といった文明にはではなく、文化や人間に向けられていたと申しました。彼が近代国家の秘密をキリスト教と教育に見出し、教育を通して主体的な人間を形成することが重要であると認識するのは、主にこのアーモスト・カレッジ在学中の三年間の教育の結果だと考えられます。

新島が密航を企てる理由の一つに幕藩体制の桎(しっこく)梏(抑圧)から逃れたいという願望がありました。身分制、階級制に縛られ、個人が全体のために犠牲を強いられ、個人の自由が極度に制約される社会に批判的であった新島は、とりわけアーモスト・カレッジの教育が一人ひとりの学生の主体性を尊重し、彼らの価値や可能性を最大限に伸ばし、自己の良心に従って生きる前述のようなトータルな人間の育成、全人教育を目指すことに、全幅の共感を抱くのです。なぜなら彼は江戸にあって硬直化した幕藩体制を批判し、強い不満を感じていましたが、アーモスト・カレッジに学んでいる、あるべき個人及びあるべき国家を模索してやっとその正解を得ることができたからです。

新島は一八六五年からニューイングランドで生活し、中・高等教育を受け、近代国家の建設は結局人をつくることにあると考えるに至りました。彼はキリスト教を信じ、デモクラシーを体得し、地方を興し、国家の牽引車役を喜んで引き受け、献身的に働く人間を育成することこそ、日本の近代国家の建設に不可欠であるという結論に到達したのです。

## 第三のチャレンジャー学校設立とキリスト教宣教

新島は一八七四(明治七)年十一月、十年ぶりに帰国し、彼の畢生の事業である近代国家を建設するうえで必要な人材を育成するための学校をつくり、合わせて全国にキリスト教を宣教し始めました。彼は一八七五(明治八)年、仏教や神道勢力の強い京都の地にキリスト教主義の中等教育機関をつくり、近代科学を教えようとした。彼の企ては無謀のそりをまぬがれませんでした。

いよいよ彼の第三のチャレンジャーが始まりました。彼の前にいくつもの大きな壁が立ちほだかりました。彼はアメリカン・ボードの宣教師だったので、彼の言動には京都府も仏教勢力も注目しました。一八七三(明治六)年にキリスト禁制の高札が撤去されたとはいえ、明治政府はキリスト教に対する厳しい態度を変えていませんでした。京都は千年を越える日本の都でありましたが、明治維新で天皇と都が東京に移ったために、急速に衰微し始めました。そこで京都府の知事になります横村正直は京都の活性化のために近代科学を教える学校を誘致しようとし、九年もアメリカ・ヨーロッパで生活した新島のもつ外国情報や知識や経験を利用することを考えたのです。しかし横村は、学校では聖書を教えてはいけない、教師にアメリカ人宣教師を雇ってはいけないという条件をつきました。新島は一八七五(明治八)年、会津藩出身の砲術師範で、非常に優れた近代国家構想をもっていた山本寛馬と結社し、学校の設立の準備を始めます。山本は京都府の顧問として横村のブレーンでしたから、新島は山本に横村の説得を依頼したと考えられます。その結果横村は、授業で聖書を用いたり、キリスト教を教えるはならないが、自宅でもらうらしいということまで譲歩しました。そして彼は学校に外国人宣教師を教師として雇い入れることは文部省の所管であるので、直接文部省へ行って交渉するようにとアドヴァイスしてくれました。新島は急遽上京し、文部省で交渉を始めました。幸いなことに、彼が在米中、岩倉使節団がワシントンに参りました折に教育部門の田中不二郎の通訳を引き受け、一年近く共に行動した間に二人には太い信頼の絆ができていました。そのときの田中が当時文部省で最高責任者の地位についていたもので、お互いの気心がわかっていました。交渉三日目になって、明治六年の「外国人宣教師を学校教師に雇ってはならない」という文部省付達第八十七号が存在し、また明治八年二月の新島の問い合わせに対する田中の宣教師を教師として雇うことはできないとの回答があったにもかかわらず、その六ヵ月後に田中が宣教師の雇い入れを許可したのは何故なのか。新島の粘り強い説得が効を奏したと簡単にはいえない大きな方針変更があったことが考えられます。もし田中が宣教師の雇い入れを拒否したと主張すれば、新島の英学校創設が不可能になり、したがって彼の遠大な学校構想が頓座することになります。この三日間は新島にとって運命的な三日間であったといえます。もう一つの壁は、仲間である宣教師たちが学校で聖書を教えることができないことに対して大きな不満を抱いていたことです。新島の理解者であったはずのJ・D・デイヴィス宣教師でさえも横村の指導を受け入れた新島の態度を批判しました。キリスト教の学校を京都の地につくらせないでおこうとする仏教勢力の強い反対がありました。しかし、新島は彼のよきブレーンであった山本寛馬の、名を捨てて実を取る現実的な方法を取り入れたから、彼は根気よく忍耐をもって説得を続け、障書をひとつずつ克服していきました。彼は高き志の実現に対する情熱と誠実な態度、そして説得力と行動力で困難を突破し、一八七五(明治八)年十一月、官許同志社英学校の開校にごこつたのです。

## 最後のチャレンジャー同志社大学の設立

次に新島の生涯にとって最後のチャレンジャーについて申し上げます。彼は一八九〇(明治二十三)年の国会開設の年を期して私立の大学をつくり、近代国家の建設に必要な人材を育成することを畢生の事業にしていました。そこで彼は同志社英学校を大学に昇格させる運動を一八八二(明治十五)年から開始し、一八八八(明治二十一年)年に「同志社大学設立の旨意」を全国に発表しました。そしてその中で彼は、近代国家の立憲政体を維持・発展させるには「二、三英雄の力」によってではなく、「実に一国を組織する教育あり、知識あり、品行ある人民」(全集一、一四〇頁)によって初めて可能になると主張するのです。一八七七(明治十)年に明治政府は東京大学をつくりましたが、そこでは政府の方針を忠実に実行する高級官僚を養成しました。しかし東大では国家に對峙し、国家を批判する人材の養成は困難です。新島にとって近代国家に必要な人材とは政府の敷いた軌道の上を走るだけでなく、時には軌道の修正を求め、新しい軌道を要求する見識と行動力をもった人材であると考えていたからです。彼は在米中に岩倉使節団の有力メンバーと繋がりができ、木戸孝允を始め森有礼や勝海舟といった大物との交わりを利用し、芽づる式に支援者を拡大していきました。新島の同志社大学設立の資金集めは、当時の政財界のみならず広く小学生・お巡りさん・刑

務所の受刑者・兵隊さん等からの浄財も含まれています。彼は母校アーモスト・カレッジがそうであったように、大学は自分たちの力でつくるものという信念をもっていましたから。

新島は生来健康に恵まれていませんでした。京都にあってキリスト教に対する監視の目は厳しく、校長としての責務と宣教師たちへの気配りと、大学設立のための募金活動に疲労困憊し、ドクター・ストップをも無視して畢生の事業の実現に邁進しました。彼の健康は一八八九（明治二十二年）頃からとみに衰え、その年の暮れ、群馬県前橋で募金活動中に病に倒れ、神奈川県大磯に避寒して体力の回復をはかりました。彼は翌一八九〇（明治二十三年）年一月五日、自分の心境を次の和歌に託しています。「いしかねも透れかきとて一筋に射る矢にこむる丈（ますらお）夫の意地」彼は肉体がボロボロになっても意気軒昂でした。石でも鉄でも自分の放つ矢は貫通させてみせるぞ、といった日本男児の意気込みを歌い上げたものです。それから十八日後に彼は四十七歳を間近にして亡くなりました。

## 私の結論

幕末・明治という激動期に生きた新島襄は「国家一分の力を竭（つく）さんとの思い」を持ち続け、四十七年間の短い人生をひた走りに走りました。それはチャレンジの連続でした。彼は事を起こす場合に広い視野から質の高い情報を収集し、根回しをし、そして速やかに決断と実行を繰り返しました。彼はよき相談相手を持ち、日本にもアメリカにも彼のために身を投げうっても惜しくないとする親友をつくっています。彼はそのような親友の力を借りながら、不可能を可能にできました。彼が畢生の事業の実現に多くの支援者を得ることができたのは、結局彼の誠実さであり、彼の人柄にあったと考えられます。彼のチャレンジが成功したもう一つの秘密は、目的を実現させるために見せた燃えるような情熱と正義感、そして自分の行動が自分のためではなく社会のため国家のためであるという確信があったからであります。彼は明治政府から再三にわたって官職につくことを求められましたが、それを断り、名誉も地位も得ようとせず、野（や）にあって自分の信ずる唯一筋の道を歩み続けました。世間では無謀であると考えられていたことに彼は果敢にチャレンジしました。それは彼がクリスチャンとして神さまが自分を守ってくださっている、力を与えてくださる、正しい方向を示してくださるという確信をもっていたからです。彼は方向を見失って進退極まったとき、常に聖書の言葉に励まされ、進むべき道を見出しています。

新島の生涯を見ますときに、困難なものへのチャレンジが人間性を磨き、成長させ、本当の喜びや満足感を与えてくれるといえます。

若い皆さん、人生は長い、しかし時は有限です。失敗を恐れず、困難から逃げないでチャレンジしてみませんか。チャレンジはあなたをたくましくしますよ。

（注）Life and Letters はA. S. Hardy ed., Life and Letters of Joseph Hardy Neesima, 1891の略で、その全訳を『新島襄全集』10で読むことができます。全集は『新島襄全集』の略です。

二〇〇八年六月四日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録